

大阪学院大学 外国語論集

第 81 号

LI構文の派生とその理論的帰結 (5)

…………… 川 本 裕 未 1

研究ノート

新語・流行語大賞から読み解くドイツの社会情勢とその授業への導入
方法 …………… 深 見 麻 奈 21

2021 年 6 月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第 81 号

2021 年 6 月

大阪学院大学外国語学会

LI 構文の派生とその理論的帰結 (5)

川 本 裕 未

7. VP-LOC について

川本 (2020b) 第5節で非能格動詞文、他動詞文、非対格動詞文のそれぞれの統語構造として以下が提案された。

- (155) a. unergatives $[_{TP} T [_{VP} DP v [_{VP} V]]]$
 b. transitives $[_{TP} T [_{VP} DP v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]$
 c. unaccusatives $[_{TP} T [_{VP} v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]$

そして、LI 構文や *there* 構文が成立するかどうかは、非対格動詞文 (155c) の統語構造の中に LOCATION 項を認可する V_{LOC} を主要部とする VP-LOC を持っていることが必要条件であると結論づけられた。

ところが、しばしば指摘されることであるが、非対格動詞でも LI 構文や *there* 構文を許さないものがある。さらに、非能格動詞や他動詞でも LI 構文や *there* 構文を生じるものも観察される。本節では、上記の川本 (2020b) 第5節での結論の反例となるようなこのような現象について議論し、これらの事例も (155a-c) の統語構造のもとで自然にその妥当性が導出されることを示す。

第7.1節で *break*、*melt*、*open* のような能格動詞の非対格動詞用法（自動詞用法）が *there* 構文を容認しない事実が、(155c) に基づいて導き出されることを示す。また第7.2節では本来 *there* 構文や LI 構文を許さない他動詞文、非能格動詞文のなかで、そういった構文が容認される場合の派生について

(155a-c) に基づいて考察する。

7.1 虚辞 **there** を含む構文

非対格動詞は (156a) のような LI 構文だけでなく、(156b) のような虚辞の **there** を使った構文の派生も可能である。

- (156) a. Down the hill rolled a baby carriage.
 b. There rolled a baby carriage down the hill.

一般に、虚辞の **there** は T の先端素性を満たすため SPEC-T に融合すると考えられている。これを、本論で展開している非対格動詞文の構造 (155c) の枠組みに当てはめるなら、(156b) の派生は次のような段階で、

- (157) [_{T'} T [_{Edge}] [_{VP} rolled [_{VP-TH} a baby carriage **rolled** [_{VP-LOC} **rolled** down the hill]]]]

SPEC-T を埋めるため、**there** が融合された結果得られると考えられる。

- (158) [_{TP} **there** [_{T'} T [_{Edge}] [_{VP} rolled [_{VP-TH} a baby carriage **rolled** [_{VP-LOC} **rolled** down the hill]]]]

しかしながら、この **there** が SPEC-T に融合するという分析は、次の (159a) のように、**there** が補文 SPEC-T と主文 SPEC-T の両方に融合して非文を形成することを阻止できないという問題点がある。

- (159) a. *There seems there to be a problem.
 b. [_{TP} there seems [_{TP} there to be a problem]]

虚辞の *there* と虚辞の *it* は、意味内容を持たず、T の先端素性を満たすだけのために SPEC-T に現れるという点では共通するが、その分布は相補分布をなす。

(160) a. There is a man in the garden.

b. *It is a man in the garden.

(161) a. *There seems that a man is in the garden.

b. It seems that a man is in the garden.

虚辞の *there* を使った文は (160a) の *in the garden* のような場所句を伴うことが多いが、以下の例のように場所句が明示的に現れていない文においても、例えば (162a) であれば *outside* や *at the door*、(162b) であれば *in the research plan* や *between John and Mary* のような何らかの場所の存在が前提となっている。

(162) a. There is a strange man.

b. There arose a problem.

つまり、(162a-b) のような文においても、話し手と聞き手の間で了解された非明示的な場所句が存在していると考えられる。高見・久野 (2002) は *there* のこのような機能を、「*There* が、場所を示す句と共起したり、場所を示す句を予測させるという事実は、その両者 [話し手と聞き手] で 1 つの場面が設定される (*scene-setting*) ことを示している」(50) と述べている。

それに対して、(161a-b) の「 seems 補文」の主文に非明示的な場所句が存在しているとは考えられない。試しに (161a-b) の主文に明示的な場所句を加え、虚辞の *it* や *there* を SPEC-T に融合すると、以下のようにいずれも非文となってしまう。

(163) a. *There seems in the park that a man is in the garden.

b. *It seems in the park that a man is in the garden.

there を使った (163a) は非文のままであるし、it の使用も (161b) では適格文であったのに場所句を加えたとなんにも非文になる。このように、「___ seems 補文」には明示的な場所句が入らないという事実は、非明示的な場所句も同様に存在しないことを示唆する。以上のことから、虚辞の **there** が SPEC-T に融合するためには、明示的であれ、非明示的であれ、場所句の存在が不可欠であり、したがって、虚辞 **there** の融合には次のような制約が課せられていると考えられる。

(164) 虚辞の **there** が融合するためには、VP-LOC を持つ構造でなければならない。

break、melt、open のような能格動詞の自動詞用法は外項を持たないことから、一般に非対格動詞に分類されるが、非対格動詞であれば許容するはずの虚辞の **there** との共起とは馴染まない。

(165) a. *There broke a glass in the kitchen.

b. *There melted a lot of snow on the streets of Chicago.

この事実も、非対格動詞文の構造 (166) ((155c) を再掲) と虚辞 **there** の融合にかかる制約 (164) から容易に導き出すことができる。第5.2節で、非対格動詞用法（自動詞用法）の能格動詞は、非対格動詞の構造 (166) の中の括弧で囲まれた VP-LOC を持たない構造、つまり (167) であると提案した。

(166) unaccusatives [TP T [vP v [VP-TH DP V_{TH} ([VP-LOC V_{LOC} PP)]]]

(167) ergatives [TP T [vP v [VP-TH DP V_{TH}]]]

(165a-b) には確かに in the kitchen や on the streets of Chicago といった場所句があるが、能格動詞は LOCATION 項を認可する VP-LOC を持たないことから、これらの場所句は付加詞にしかすぎず、項ではない。したがって、(164) によって there の SPEC-T への融合が退けられるのである。

本節では、虚辞の there が SPEC-T に融合する際に課される制約として、VP-LOC を含む構造でなければならないとする (164) を提案し、そこから break、melt、open のような能格動詞の自動詞用法には虚辞の there が生起できない事実を導き出せることを示した。

7.2 他動詞文、非能格動詞文

一般に、外項を持つ他動詞、および非能格動詞は虚辞 there の出現や LI 構文を許さない。

(168) a. *There laughed someone cheerfully.

b. *In the room laughed someone cheerfully.

(169) a. *There eat sandwiches many people.

b. *In the shop eat sandwiches many people.

(170) a. *There put a book someone on the table.

b. *There put someone a book on the table.

c. *On the table put a book someone.

d. *On the table put someone a book.

第5節で提案した非能格動詞文、および他動詞文の構造を再録する。

- (171) a. unergatives [TP T [_{VP} DP v [_{VP} V]]]
 b. transitives [TP T [_{VP} DP v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]

(171a) の非能格動詞は、虚辞の *there* や項としての場所句を認可する VP-LOC を有していないことから、(168a-b) に見られるように *there* の生起や LI 構文を許さないことが自動的に導出される²⁰。

一方、(171b) で表される他動詞文には、場所句を項として持たない、つまり VP-LOC を持たない *eat* のような動詞と、場所句を項として持つ、つまり VP-LOC を有する *put* のような動詞がある。前者は非能格動詞と同様に、そもそも虚辞 *there* や項としての場所句を認可する V_{LOC} を持たないので、(169a-b) に示されるように *there* の生起や LI 構文を容認することができない。それに対して、VP-LOC を持つ後者の動詞群は (170a-d) の派生において、ある段階で (172a) のような構造を持つ。

- (172) a. [_{VP} someone v [_{VP-TH} a book V_{TH} [_{VP-LOC} put on the table]]]
 b. [_{VP} someone put [_{VP-TH} a book ~~put~~ [_{VP-LOC} ~~put~~ on the table]]]

そして動詞 *put* は V_{TH} を経て v に移動し、(172b) の構造になる。(172b) の vP には外項 *someone* があるため、この vP はフェーズとなり、VP-TH 以下が意味部門および PF へ転送され、T をはじめとする vP の外側の要素にとつては vP 内部にある場所句と Agree の関係を結んだり、移動させることなどができなくなるため (170a-d) は非文になるのである。

以上見てきたように、非能格動詞、および他動詞はそれぞれ (171a-b) の構造を持つとすることで、これらの動詞群が *there* の生起や LI 構文を許さないことに対して正しく説明を与えることができる。

しかしながら、一部の非能格動詞、および他動詞の中には虚辞 *there* の生起や LI 構文を許すものがあることが指摘されている。まず、*take place*、*take*

root のような複合動詞は、他動詞の **take** を用いながら虚辞 **there** の生起、および LI 構文を許容する。

- (173) a. In that year took place a great renewal.²¹
 b. There took place a regular clearance of the Augean stables.
 c. There took root the idea of starting the academy with his co-founders.

これらの複合動詞の中の **place** や **root** は冠詞等の限定詞を欠いていることから DP まで投射せず、N の投射に留まっている。したがって、動詞 **take** の対格補部とは考えにくい。これらは動詞 **take** に編入されて、**take place**、**take root** はそれぞれ **occur**、**pervade** という意味を持つ1つの非対格動詞をなしていると考えられる。例えば (173a) は以下のような構造を持つ。

- (174) [_{VP} v [_{VP-TH} a great renewal V_{TH} [_{VP-LOC} [_{V-LOC} take place] in that year]]]

複合動詞 [_{V-LOC} take place] は V_{TH} を経由して v まで上昇する。その後、TP、および TopicP が投射し、T と Topic head が in that year をそれぞれの指定部に誘引することによって (173a) が派生される。

- (175) [_{TopP} in that year [_{TP} ~~in that year~~ T [_{VP} take place [_{VP-TH} a great renewal ~~take place~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} ~~take place~~] in that year]]]]]

さらに次のような他動詞の例がある。Kayne (1979, 1994) は、(176a-b) および (177a-c) のような文は他動詞文でありながら、**there** 構文がぎりぎり容認できる (marginally acceptable) としている。

(176) a. There hit the stands a new journal.

b. There entered the room a strange man.

(Kayne 1994)

(177) a. There reached his ear the sound of voices and laughter.

b. There entered the room an indescribably malodorous breath of air.

c. There crossed her mind a most horrible thought.

(Kayne 1979)

しかしながら、これらの文における意味上の主語、つまり (176a-b) の a new journal や a strange man、(177a-c) の the sound of voices and laughter、an indescribably malodorous breath of air、a most horrible thought は AGENT 項や CAUSER 項ではなく THEME 項と考えるのが妥当である。もし、意味上の主語を AGENT 項として解釈できるものと置き換えるなら、これらの文は容認不可能となるからである。

(178) a. *There hit the stands a juvenile delinquent.

b. *There hit balls the high-school softball coach.

c. *There crossed the street the elementary-school children.

意味上の主語が THEME 項ということは、これらは内項ということになる。一方、動詞の直後の目的語 DP はすべて GOAL を表し、本稿のアプローチの LOCATION 項に含まれるものである (川本 (2020b) 注17参照)。すなわち、(176a-b) や (177a-c) は外項を持たない文であり、その構造が transitive 文の構造 (171b) であると考えすることは難しい。むしろ、外項を持たないという点で非対格動詞と同じ特徴を持つ。

これらの動詞は GOAL DP を欠いた場合、there 構文をつくることはできな

い。

- (179) a. *There reached the sound of voices and laughter.
 b. *There entered a nice breeze.
 c. *There crossed a most horrible thought.

また、「動詞 + GOAL DP」は隣接している必要がある。

- (180) a. *There hit a new journal the stands.
 b. *There entered a strange man the room.

さらに、これらの「動詞 + GOAL DP」は「発売される」「入ってくる」、「思い浮かぶ」といった出現や生起を表し、この点も非対格動詞の特徴と一致する。

これらの事実から、(176a-b) や (177a-c) は他動詞文ではなく、「動詞 + GOAL DP」がまとまって一つの非対格動詞としての構造 (166) ((181) として再録) を持っていると考えられる。

- (181) unaccusatives [TP T [vP V [VP-TH DP V_{TH} ([VP-LOC V_{LOC} PP)]]]

例えば (176a-b) の派生を考えるなら、(176a) の *hit the stands*、および (176b) の *enter the room* は、それぞれ *arrive at the stands*、*go into the room* という「非対格動詞 + 場所句 PP」に言い替えることが可能で、たまたま *enter* や *hit* という動詞が対格を付与する能力があるために格付与子としての *at* や *into* といった前置詞を必要とせず、場所句が *the stands*、*the room* という剥き出し (*bare*) のまま表出していると考えられる。つまり、(176a) では *the stands* が、(176b) では *the room* が *LOCATION* 項として存在するのである。*LOCATION* 項が認可されるためには *V_{LOC}* が必要である。(176a-b)

では LOCATION 項の *the stand* や *the room* が V_{LOC} 内部に取り込まれる形で存在し、その複合的な V_{LOC} がまず VP-TH に、次いで vP へと移動して、最後に *there* が融合して派生されると考えられる。

- (182) a. [_{TP} There [_{vP} hit the stands [_{VP-TH} a new journal ~~hit the stands~~ [_{VP-LOC} ~~hit the stands~~]]]]
 b. [_{TP} There [_{vP} entered the room [_{vP} v [_{VP-TH} a strange man ~~entered the room~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} ~~enter the room~~]]]]]]

このように、(176a-b) および (177a-c) のように他動詞が *there* 構文に現れている例は、非対格動詞の構造と同様な構造を持つことで、*there* の出現を許すことになる。ただ、純粋な非対格動詞と異なり、これらの動詞は補部の GOAL DP に対格を付与するという点で、この場合「非対格」動詞という名称で呼ぶことは正確とは言えないが、構造として非対格動詞の (181) と同じ構造を持つのである。

同様の考え方が次のような非能格動詞にもあてはまる。*walk* のような動詞は本来、(183a-b) が示すように、虚辞 *there* の生起、および LI 構文を許さない。

- (183) a. *There walked in the garden a strange man.
 b. *In the garden walked a strange man.

しかし、*into the garden* や *out of the bushes* のように GOAL や SOURCE のような動きの方向を示す場所句を伴うと *there* 構文や LI 構文が容認される²²。

- (184) a. There walked into the garden a strange man.
 b. Into the garden walked a strange man.

- (185) a. There ran out of the bushes a large deer.
 b. Out of the bushes ran a large deer.

これらの文においては方向を示す場所句を伴うことで、出現や生起といった非対格動詞と同じ意味を持つことになることから、前述の「他動詞 + GOAL PP」と同様に、これらの「非能格動詞 + 動きの方向を示す場所句 PP」がまともって一つの非対格動詞としての構造を持つと考えられる。それを示すものとして、動詞と動きの方向を示す PP が隣接していないとかなり容認度が下がるという事実がある。

- (186) a. ??There walked a strange man into the garden.
 b. ??There ran a large deer out of the bushes.

(184a-b) や (185a-b) では LOCATION 項の *into the garden* や *out of the bushes* が V_{LOC} 内部に取り込まれて複合的な非対格動詞 V_{LOC} が形成され、それが VP-TH、vP と移動する。そして SPEC-T に *there* が融合すれば (184a) や (185a) が派生され、*there* の融合の代わりに場所句 PP が SPEC-T に移動し、その後 TopicP に移動すれば (184b) や (185b) が派生される。

- (187) a. [_{TP} There [_{vP} walked into the garden [_{VP-TH} a strange man walked ~~into the garden~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} walked into the garden]]]]]
 b. [_{TopicP} into the garden [_{TP} ~~into the garden~~ [_{vP} walked into the garden [_{VP-TH} a strange man walked into the garden [_{VP-LOC} [_{V-LOC} walked into the garden]]]]]]]
 (188) a. [_{TP} There [_{vP} ran out of the bushes [_{VP-TH} a large deer ~~ran out of the bushes~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} ran out of the bushes]]]]]]

- b. [_{TopP} out of the bushes [_{TP} ~~out of the bushes~~ [_{VP} ~~ran out of the bushes~~
 [_{VP-TH} a large deer ~~ran out of the bushes~~ [_{VP-LOC} [_{V-LOC} ~~ran out of the~~
 bushes]]]]]]

本節では、本来 *there* 構文や *LI* 構文を容認しない他動詞や非能格動詞がそれらの構文を形成している例について考察した。どちらの場合も、そこで使われている動詞は、直後に位置する *LOCATION* 項と結合することで非対格動詞の構造 (181) と同様の構造を持つことになるため、*there* 構文や *LI* 構文の派生が可能になるのである。

8. まとめといくつかの理論的帰結

5回にわたって連載してきた本論では *LI* 構文の派生について考察し、*LI* によって前置された場所句は、*T* によって *Agree* に基づいて *SPEC-T* に誘引され、さらに *Topic head* によって誘引されて *TopicP* の指定部に移動している

とすることで、場所句が主語的な特性を有するとともに話題としての特性も持っている事実を説明できることを示した。また、この *LI* 構文で前置される場所句は付加詞ではなく、項として機能していることに注目し、*LI* 構文を許す非対格動詞文はこの場所句を *LOCATION* 項として認可する *V_{LOC}* を有しているとし、それに対して *LI* 構文の派生を容認しない非能格動詞は *V_{LOC}* を持たないと提案した。そして、*V_{LOC}* の投射である *VP-LOC* を選択できるのは、*THEME* 項を認可する *V_{TH}* であり、そこから、*V_{TH}* を持つ他動詞文には *VP-LOC* を選択するもの (*put* など) と *VP-LOC* を選択しないもの (*eat* など) があることが導き出された。さらに、このような他動詞に見られる *V_{TH}* による *VP-LOC* の選択の随意性を、非対格動詞にも一般化することによって、*break* や *open* などの能格動詞を *V_{LOC}* を持たない非対格動詞として捉えることが可能となり、能格動詞の非対格動詞用法 (自動詞用法) において、*there* の生起や *LI* 構文の派生が許されない事実を説明できることを示した。

さらに、一般的には **there** 構文や **LI** 構文の派生を許さない他動詞や非能格動詞でも、これらの構文を容認する場合があるという事実に対して、このような文は項となる場所句を有しており、それを認可する V_{Loc} とその投射である **VP-LOC** を選択する V_{Th} が存在し、動詞は直後の **LOCATION** 項の場所句と結合することで非対格動詞の構造と同様の構造をなし、その結果 **there** 構文や **LI** 構文を許容することになるということを示した。

以上の議論を進めていく中でいくつかの理論的帰結が導き出された。第4.1節では、文主語や叙実述語補文の命題は断定内容にはなり得ず、話者はその命題を前提としており、それらは既出・既知情報であることから、文主語および叙実述語補文の **ForceP** には **TopicP** や **FocusP** が投射できないこと、さらにこのことは同様の特性を示す、定の制限用法の関係代名詞節にも当てはまり、このタイプの関係代名詞節も **TopicP** や **FocusP** を投射していないことが示された。

また、第4.4節では、標準英語の補文 **C** が持つ時制素性が **EPP** 素性を持たないのに対して、アイルランドで話されている英語変種の **Hiberno-English** の補文 **C** の時制素性は **EPP** 素性を持っていることが導かれた。

LI 構文の派生について考察するなかで帰着したのが、項である場所句を持つ文の構造として **VP-LOC**、およびその主要部の V_{Loc} の存在である。第5節では、**VP-LOC** の有無を非能格動詞文、他動詞文、能格動詞文にも適用することで、非対格動詞文以外の構文も含めて、以下のように統一的にそれぞれの統語構造を表すことができることを示した。

- (189) a. unergatives $[_{TP} T [_{VP} DP v [_{VP} V]]]$
 b. transitives $[_{TP} T [_{VP} DP v [_{VP-TH} DP V_{Th} ([_{VP-LOC} V_{Loc} PP)]]]$
 c. unaccusatives $[_{TP} T [_{VP} v [_{VP-TH} DP V_{Th} ([_{VP-LOC} V_{Loc} PP)]]]$

そして、**LI** 構文の派生、および虚辞 **there** の融合のためには、**VP-LOC** を持

つ構造でなければならないと結論づけた。

(189a-c) をさらに統一化・単純化するならば、以下のように外項を持つ文と外項を持たない文の二分化を図ることが可能かもしれない。(189a-b) は外項を持つという点で共通している。さらに、本来、目的語を取らない非能格動詞の中には、(190a-g) のように同族目的語 (cognate object) を取り、他動詞のようにふるまうものがある。

- (190) a. The man laughed a sad laugh.
 b. The girl smiled a sweet smile.
 c. The baby slept a sound sleep.
 d. The young actress dreamed an impossible dream.
 e. The old man sighed a weary sigh.
 f. It's easy to talk the talk.
 g. You need to walk the walk first.

上記のような文では同族目的語が明示的に動詞のあとに現れているが、明示的な目的語が表れていない非能格動詞も非明示的な目的語を持っていると仮定するなら、非能格動詞文の統語構造 (189a) は他動詞の統語構造 (189b) に包括され、つまり (190a-g) のような構文は (189a) ではなく、(189b) の VP-LOC を欠いた構造であると考えることができる。このことから、(189a-b) を 1 つにまとめ、文の構造を以下のように単純化することが可能かもしれない。

- (191) a. transitives and unergatives:

[_{TP} T [_{VP} DP v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]]

- b. unaccusatives: [_{TP} T [_{VP} v [_{VP-TH} DP V_{TH} ([_{VP-LOC} V_{LOC} PP)]]]]

外項を持つ文は (191a) を、外項を持たない文は (191b)²³ をその構造として

持つのである。

非能格動詞文において虚辞 *there* の出現や LI 構文が容認されないことに対して、第7.2節では非能格動詞文の構造 (189a) が VP-LOC を持たないので、このような構文は排除されると説明したが、(191a) では VP-LOC を持つ構造の可能性も示されており、この説明は有効ではなくなる。しかしながら、たとえ VP-LOC を備えた構造であったとしても、非能格動詞文は他動詞文同様、外項を持つので *vP* がフェーズとなり、T 主要部や SPEC-T のような *vP* の外側の要素にとっては *vP* 内部にある場所句と Agree の関係を結んだり、移動させることなどができないことから、虚辞 *there* の SPEC-T への融合や場所句の SPEC-T への移動は不可能である。

例えば、動詞 *sit* を使った (192) で「ソファーに座った」という行為を表す意味と「ソファーに座っている」という状況を表す意味の間で曖昧性が生じるのは、動詞 *sit* が主語 *Sam* を外項として持つ (191a) の統語構造と、外項を持たず内項の *Sam* が主語となっている (191b) の2つの構造を許すからである。

(192) *Sam sat on the sofa.*

それぞれの動詞は、どの統語構造をとることができるのか、どの構造をとることができないのか、また、VP-LOC を持つのか持たないのかについての情報を語彙特性として有していて、子どもは各動詞とその語彙特性を併せて獲得していくと考えられる。

注

20 第8節で (168a-b) が非文になることの説明の代案を提示する。(191a) 以降の議論を参照のこと。

21 (173a) において前置された前置詞句は場所句ではなく、時間を表す表現

(以下、「時間句」と呼ぶ)である。このように時間句も前置して LI 構文を派生することが可能であることから、VP-LOC は場所句だけでなく、時間句も項として認可していることになる。時間句は時間軸上の場所を示しているという意味で、場所句の一種と捉えることが可能なかもしれない。前節で、高見・久野 (2002) が虚辞の *there* の機能として、話し手と聞き手の間での場面を設定する (scene-setting) ことと述べていることを紹介したが、その虚辞 *there* を認可する VP-LOC は「場面設定」のための変数として場所のみならず、時間をも同様に認識していることになる。

- 22 非対格動詞文の特徴のひとつが完了相 (telicity) を表していることである。そして *into the garden* のような着点を示す語や、*out of the bushes* のような起点を示す語は、完了相を表すことに貢献する。つまり、起点や着点が示されることで、出来事の成立や完了を捉えることができるのである。その意味で、*into the garden* や *out of the bushes* のような場所句は、この文の解釈上必要な項として機能していることになり、それ故に (184a-b) および (185a-b) は場所句を項として持つ (181) の構造を持つと考えることができる。
- 23 受動文も外項を持たないので、(191b) は非対格動詞文のみならず、受動文の構造でもある。受動文 (ia) の構造は (ib) によって示される。

(i) a. Many books are placed on the desk.

b. [_{TP} Many books are [_{VP} placed [_{VP-TH} ~~many books~~ placed [_{VP-LOC} placed on the desk]]]]

参考文献

- Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step:*

Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2001) Derivation by Phase. In: Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2008) On Phases. In: Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166. Cambridge, Mass: MIT Press.

川本裕未 (2019a) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (1)」『大阪学院大学外国語論集』第77号.

川本裕未 (2019b) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (2)」『大阪学院大学外国語論集』第78号.

川本裕未 (2020a) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (3)」『大阪学院大学外国語論集』第79号.

川本裕未 (2020b) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (4)」『大阪学院大学外国語論集』第80号.

Kayne, Richard S. (1979) Rightward NP Movement in French and English. *Linguistic Inquiry* 10: 710-719.

Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』東京：研究社.

The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 5

Yumi Kawamoto

This whole article, published in five parts, investigates the derivation of the Locative Inversion construction (LIC), exemplified by the sentence *Down the hill rolled a baby carriage*, which appears to involve inversion of a locative phrase with the thematic subject. Focusing on the fact that the fronted locative phrase in the LIC exhibits characteristics of both the subject of a sentence and the fronted focused phrase in the topicalization construction, we argue that the LIC locative phrase moves to SPEC-T first and then moves to the TopicP (Parts 1-3).

In Part 4, we further argue that the LIC, as well as the existential *there*-construction, is allowed only by an unaccusative verb construction carrying VP-LOC, headed by V_{LOC} , which licenses LOCATIVE arguments in the following structure:

- (i) $[_{TP} T [_{VP} V [_{VP-TH} DP V_{TH} [_{VP-LOC} V_{LOC} PP]]]]$

However, the LIC and *there*-construction are observed also in some transitive sentences and unergative sentences such as (iia-b), which seemingly contradicts the conclusion reached in Part 4.

- (ii) a. There entered the room a strange man.

b. Into the garden walked a strange man.

In Part 5, we present some evidence which indicates that the verb and the following locative DP in (iia) (*entered* and *the room*) and the verb and the locative PP in (iib) (*walked* and *into the garden*) are amalgamated into unaccusative verbs. These amalgamated unaccusative verbs are assumed to be put into the derivation as V_{LOC} in (i) and the locative DP *the room* and the locative PP *into the garden* are licensed as LOCATIVE arguments. This leads us to consider (iia-b) are not counterexamples to our model anymore.

By pushing forward with the hypothesis of VP-LOC, we can ultimately reach the logical conclusion that the syntactic structures of English sentences are basically classified into two types: the one that has an external argument and the other that lacks an external argument. Each type can have VP-LOC optionally. The LIC is only derived from the syntactic structure which comes with VP-LOC without an external argument.

新語・流行語大賞から読み解くドイツの 社会情勢とその授業への導入方法

深 見 麻 奈

1. はじめに

年の瀬になると「新語・流行語大賞」や「今年の漢字」が発表され、1年が過ぎ去ろうとするのを実感しつつその年の社会情勢を振り返る習慣があるが、ドイツでも、同じ時期にその年の「新語・流行語大賞 (Wort des Jahres)¹」が発表されていて、それが年末の風物詩の一つとなっている。それを発表しているのがドイツのヴィースバーデンに本部を置き、日本を含む世界35ヶ国にある支部も含めて合計101の支部を有する「ドイツ語協会 (Gesellschaft für deutsche Sprache, 略称 GfdS)²」である。

「ドイツ語協会」が創設されたのは、第二次世界大戦が終わった2年後の1947年であるが、その前身は1885年に設立された「全般ドイツ言語協会 (Allgemeiner Deutscher Sprachverein, 略称 ADSV)³」という団体である。「全般ドイツ言語協会」は、ドイツ語で表現できる物事は外来語ではなく必ずドイツ語で表現することを推進するという国粋主義的な団体であったが、戦後新たに、国粋主義的な傾向を廃した「ドイツ語協会」が創設された。2017年に70周年を迎えた「ドイツ語協会」は、ドイツにおいて最も古く最も重要な言語保護機関であるとされ、連邦政府の文化・メディア庁より支援を受けている⁴。

その具体的な任務は、言語の使用状況を観察して記録すること、連邦議会の法律文書に使用された言語の確認、メディアや個人から寄せられる年間5,000件以上の言語に関する質問への回答、新語・流行語大賞の発表および赤ちゃん

の人気の名前リストの発表や命名に関する相談、2年ごとにメディアに対して言語文化賞を授与すること、各種セミナーや報告を通じてドイツ語に対する意識を公衆レベルで深めることである。

「ドイツ語協会」の任務の1つである新語・流行語大賞は、1971年に初めて発表されて以来、1977年より毎年年末にその年の政治的、経済的、社会的な事情を反映する言葉に焦点を当てたトップ10が発表されているが、その選出方法は、次の通りである。外部の各種メディアや投書からその年の多くの資料⁵を集め、それらを典拠にして、協会の理事および学者からなる審査委員会が、メディアで話題となりその年を特徴づける10の言葉を選んでいる。例えば、2020年の場合、約2,500の典拠となる資料から9名の審査員（協会の理事5名、学者4名）が、ドイツの新語・流行語大賞を選出した⁶。

新語・流行語に選出される語句は、その年に誕生した新語であるか、既存の語句であってもその語句が新たなコンテキストの中で使われるようになったり、新たな意味が加わったりしたものである。その語句が、言語的に興味深いものであるかクリエイティブなものであるかも重要である。また、その表現がどれくらい使用されているかという頻度も重要な要素ではあるが、その言葉の意義や広く世間に知られているかということとその質が選出の決め手となる。それらは、現代史を形成する言葉になっていくが、選ばれた語句を評価したり、その使用を勧めたりするものではないとされている。

ドイツの新語・流行語大賞の50年近い歴史のなかで、これまでに選ばれた語を分野別に分類し、その傾向や時代の流れによる社会の変化を分析したり、言語学的なアプローチから語句を分類・説明したりするなどの手法を取ることでも可能だが、本稿では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的大流行により大きな転換期となった2020年のドイツの新語・流行語を例として取り上げ、そこからどのようにドイツ社会の情勢を分析していくのか、日本とも比較しながら考察していこうと思う。もちろん、ドイツの新語・流行語大賞だけで、ドイツ社会の現状がくまなく分かるわけではないが、少なくとも、そ

れを通じて、どのようなことがその年ドイツで話題になったかを知る手がかりとするのは、遠く離れた国に住む我々にとって意義深いことであると思う。

さらに、ドイツの新語・流行語をどのようにドイツ語の授業に導入していけばよいのかその手法を紹介していきたい。

[GfDS] Gesellschaft für deutsche Sprache

Wort des Jahres 2020

Ein neues Wortfeld entsteht

R-Wert Corona-Kabinett Kontaktbeschränkung
Risikogruppe Corona-Warn-App
Querdenker Mindestabstand kontaktlos
Herdenimmunität Mund-Nasen-Bedeckung
Corona-Party Pandemie Einreiseverbot AHA-L
Geisterspiele Kurzarbeit Übersterblichkeit
Lockdown Corona Covid-19
Coronoia systemrelevant 7-Tage-Inzidenz
Triage Maskenpflicht langvirig Homeschooling
Verschwörungserzählung Community-Maske
Covidiot Social Distancing
Homeoffice Corona-Leugner
Superspreader Bleiben Sie gesund! Klopapier-Krise
Ausgangssperre Beherbergungsverbot

Wörter der vergangenen Jahre

2019	2018	2017
Jamaika-Aus	Heißzeit	Respektrente
Ehe für alle	Funklochrepublik	Rollerchaos
#MeToo	Ankerzentren	Fridays for Future
cowfefe	Wir sind mehr	Schaulästige
Echokammer	strafbelobigt	Donut-Effekt
Obergrenze	Pflegeroboter	brexitmüde
Diesel-Gipfel	Diesel-Fahrverbot	gegenoogeln
Videobeweis	Handelskrieg	Bienensterben
„Denkmal der Schandee“	Brexit-Chaos	Oligarchennichte
hyggelig	die Mutter aller Probleme	Geordnete-Rückkehr-Gesetz

2016	2015	2014
postfaktisch	Flüchtlinge	Lichtgrenze
Brexit	Je suis Charlie	schwarze Null
Silvesternacht	Grenit	Goßesedank
Schmahkritik	Selektorenliste	Russlandverstehier
Trump-Effekt	Mogel-Motor	bahnsinnig
Social Bots	durchwinken	Willkommenskultur
schlechtes Blut	Selfie-Stab	Social Freezing
Gruselclown	Schimmel-WM	Terror-Tourismus
Burkinverbot	Flexitarian	Freistokspray
Oh, wie schön ist Panama	Wir schaffen das!	Generation Kopf unten

図1：新型コロナウイルス感染症関連の語句が並ぶ2020年のドイツの新語・流行語と2014年から2019年のドイツの新語・流行語トップ10に選ばれた言葉。

作成：ドイツ語協会

2. ドイツの新語・流行語大賞からドイツの社会情勢を読み解く

－2020年の場合－

ドイツの新語・流行語大賞を使用してどのように、社会情勢を読み解くかの例として、まず「ドイツ語協会」が発表した2020年のトップ10を紹介し、それを手掛かりとして2020年のドイツ社会がどのような状況であったのかを2020年の日本の新語・流行語とも比較しながら考えてみたい。

2020年ドイツの新語・流行語大賞 (Wörter des Jahres 2020)⁷

1位 Corona-Pandemie (コロナパンデミック)

新型コロナウイルス感染症が全国的・世界的に大流行している状況のこと。Pandemie は、ギリシア語の *panḗmos* (*pan*-「全て」+*dēmos*「人々」) に由来する⁸。2020年のドイツの新語・流行語大賞の選出の典拠となる資料約2500のうち、1000近くもの資料に Corona-Pandemie (コロナパンデミック) という言葉が登場していた⁹。

2位 Lockdown (ロックダウン)

新型コロナウイルス感染症は主に飛沫で人から人に感染するため、流行が拡大しつつある都市を封鎖して、住民の移動や交流を制限するとともに、社会活動を一時的に停止させることで流行を抑えようとする政策のこと。疫病の流行で家から出たり移動したりすることが制限されている事態¹⁰を指す言葉として、2020年の新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、世界中で使われるようになった。

2020年当初、新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) は、未知の病原体であり、そのワクチンもまだ開発されていなかった。薬剤やワクチンを用いる20世紀以降の「薬物的な感染症対策」と区別して、ロックダウンや感染者の隔離、国境での検疫などは「非薬物的な感染症対策 (Non-pharmaceutical

intervention)」と呼ばれる古典的な手法である¹¹。

ドイツでは、2020年3月16日より1回目のロックダウン（4月下旬以降段階的に緩和）が、また、11月2日より2度目のロックダウンが本稿を執筆している2021年2月17日現在行われている。

3位 Verschwörungserzählung（陰謀物語）

ドイツ語には、もともと Verschwörungstheorie（陰謀論）という言葉があるが、Theorie（論）と呼ぶには至らないような戯言のことを Verschwörungserzählung（陰謀物語）というようになった。新型コロナウイルス感染症にまつわる陰謀物語やそのワクチンへの陰謀物語、2020年のアメリカの大統領選挙で不正があったと唱える陰謀物語がその例である。ドイツでは、新型コロナウイルス感染症蔓延防止のための各種規制に反対するデモが各地で開催されたが、その一部の人々は、新型コロナウイルスが次世代通信規格「5G」に関連していると言ったり、ビル・ゲイツと関連付けたりする陰謀物語¹²を唱えた。2020年8月29日には、そのデモ隊の一部と極右勢力400人程度が国会議事堂に押し寄せ、正面の外階段付近を占拠する事件が起こった¹³。

4位 Black Lives Matter（黒人の命は大切だ）

2012年、アメリカのフロリダ州でトレイボン・マーティンという黒人の高校生が夜、フードをかぶって飲み物とお菓子を買って帰るとき、自警団の男性に不審者と見なされて射殺された。この黒人高校生は、銃などは持っていなかったが、男性は正当防衛が認められ無罪になった。それを知ったアリシア・ガルザという黒人女性が SNS に投稿した文章、“Black people. I love you. I love us. Our lives matter, Black lives matter.” が始まりで、これを見た友人の女性がハッシュタグをつけ、そこから「Black Lives Matter（黒人の命は大切だ、略称 BLM）」という言葉が SNS で拡散していった。2014年には白人の警察官による取締りで、黒人の命が奪われるケースが相次ぎ、そのたびに

抗議の声が上がり「**Black Lives Matter**」という言葉がさらに広がっていった¹⁴。

2020年5月25日、アメリカのミネソタ州で、黒人男性ジョージ・フロイドが白人警官に暴行されて死亡するという事件¹⁵をきっかけに、アメリカで人種差別抗議運動が大きな広がりを見せ、これが黒人に対する暴力や構造的な人種差別の撤廃を訴える世界的な運動へ展開していった。

ドイツでも2020年6月6日、アメリカ国外では最大規模とされる抗議運動が、ベルリンで1万5,000人、ハンブルクで1万4,000人、ミュンヘンで2万人以上を集め行われた。アメリカへの共感だけではなく、ドイツ国内に存在する人種差別、とりわけ警察による「レイシャルプロファイリング」に対する抗議活動が展開された¹⁶。6月10日には、長谷部誠や鎌田大地らが所属するドイツのプロサッカーリーグ「ブンデスリーガ」1部のアイントラハト・フランクフルトが、白いユニホームの胸に「#blacklivesmatter」というメッセージを掲げて戦い、その模様は世界200か国で放映された¹⁷。

5位 AHA（距離・衛生・日常生活におけるマスク着用）

「Aha」は、「ははあ」「あっそうか」「ほら」「そらね」といったニュアンスでもともとよく使われているドイツ語の間投詞である。その馴染みのある言葉を使ってドイツ版の「新しい生活様式」を示したのがAHAである。AHAは「**A**bstand（距離）、**H**ygiene（衛生）、**A**lltagsmaske（日常生活におけるマスク着用）」の頭文字で、「最低でも1.5mの対人距離をとり、定期的に手を洗い、口と鼻を覆うものを着用すること」を意味する。**AHA**に加えて**AL**、すなわちコロナ警告アプリの利用（Appの「**A**」）及び、複数人が滞在する屋内での定期的な換気（lüftenの「**L**」）も推奨されている。なお、ドイツでは2021年1月下旬より公共交通機関を利用する際や買い物の際に、14歳以上の人に一定の基準を満たした医療用マスクの着用が義務化された¹⁸。

6位 **systemrelevant** (システムに関連している)

直訳すると、**system** (システムに) **relevant** (関連している)。**relevant** は、ラテン語由来の形容詞¹⁹である。ここでのシステムに関連しているとは、倒産するとその国のインフラを棄損するような企業のことや、医療・福祉・警察・消防・農業・食料品や日用品の販売・流通・運輸・通信・電気・ガス・水道・ごみの収集や処理などの分野で社会の基幹を支え、ロックダウンの最中でもテレワークができない職業のことを指す。これに近い言葉として、日本でも「エッセンシャル・ワーカー」という言葉が使われるようになった²⁰。

7位 **Triage** (トリアージ)

フランス語で「選別する」という意味の **trier** に起源を持つ医学用語。大量の患者が発生した場合、緊急度や重症度、回復の見込みなどから治療の優先順位を決めること。18世紀末、フランス軍のナポレオン・ボナパルトがエジプトとシリアに侵攻し、多数の負傷者を出したことをきっかけに、フランス軍の軍医が階級に関係なく、傷の重症度に応じて兵士を分類、治療するという方法を実践したことがはじまりとされる²¹。コロナ禍においては、限られた医療資源の配分を巡り、トリアージで優先順位が低いと判断された人々が切り捨てられる可能性についての議論が巻き起こった。

8位 **Geisterspiele** (無観客試合)

Geister はドイツ語で「幽霊」という意味で、**Geisterspiele** は直訳すると「幽霊試合」となる。幽霊試合とは、(プロ) スポーツの「無観客試合」のこと。ドイツでは、サッカーのブンデスリーガの2019/20シーズンが2020年5月16日より無観客で再開された²²。2020年11月2日からの2度目のロックダウンの最中も試合は中止されることなく無観客で行われている²³。

9位 Gendersternchen (ジェンダーの小さい星)

記号の「*」は、一般に asterisk (アスタリスク) と呼ばれるが、ドイツ語では Sternchen (小さい星) ともいう。

ドイツ語では、人の立場を表す言葉の大多数は、男性形が基本形で、その女性形を表すときは、ほとんどの語の場合、男性形に接尾辞の -in をつけて表現している。

例

読者 (単数形) の場合

der Leser (〈男性の〉読者) ⇒ die Leserin (女性の読者)

読者 (複数形) の場合

die Leser (〈男性の〉読者たち) ⇒ die Leserinnen (女性の読者たち)

「読者」の複数形の場合、男性読者も女性読者も含めて die Leser (読者たち) と表現していたが、近年は die Leser und Leserinnen もしくは die LeserInnen (男性の読者たちと女性の読者たち) と表記することが一般的になってきた。さらに、ドイツで2018年12月に身分登録法 (Personenstandsgesetz (PStG)) が改正され、出生した子の出生登録簿への登録の際、その子を女性にも男性にも属させることができない場合は「複 (divers)」と記載することもできるようになり、同時に性分化疾患 (DSD) を有する人々も身分登録上の性別の記載を「女」、「男」又は「複」に置き換えたり削除したりできるようになって以降²⁴、例えば上に挙げた「読者」の複数形の場合、die Leser (男性の読者たち) や die Leserinnen (女性の読者たち) だけではなく die Leser*innen (男性の読者たちや女性の読者たちだけではなく、それらの性には当てはまらない多様な性の読者達も含んだ読者たち) と表記する方法が、多くの問題²⁵を孕みながらも広まりつつある。この「*」のことを「ジェンダーの小さい星」と呼ぶ。ちなみに、Leser*innen の読みかたは、Leserinnen (女性の読者たち) と同じであるが、Leserinnen 「レーザーリネン」と区別するために

Leser*innen の「*」の後に間を置いて「レーザ リネン」と読むことになっている。

なお、単数形の Leser*in は、男女2つの性には当てはまらない多様な性の読者のことを指す表現方法である²⁶。

10位 **Bleiben Sie gesund! (お元気で！)**

bleiben は、ここでは「いつまでも～のままである」という状態をあらわすドイツ語の自動詞で gesund は「健康な」という意味の形容詞である。Bleiben Sie gesund! は、直訳すると「いつまでも健康でいてください!」という意味になる。ドイツ語圏では、別れ際にさようならやバイバイというだけでなく、例えば Schönes Wochenende! (楽しい週末を!) など一言加えるのが慣例となっているが、コロナ禍のドイツにおいては、相手が新型コロナウイルスに感染したり他の病気に罹ることなく、今後も元気でいられるようにとの願いを込めて別れ際に **Bleiben Sie gesund!** と言うのが定番となった。

以上、2020年のドイツの新語・流行語のトップ10を紹介したが、次にその内容から2020年のドイツの社会情勢を日本とも比較しながら考察していこうと思う。4位の **Black Lives Matter** (黒人の命は大切だ)、すなわち人種差別撤廃運動や、9位の **Gendersternchen** (ジェンダーの小さい星)、すなわちジェンダーの多様性に配慮した言語表現にまつわる問題以外は、コロナパンデミックに関連する表現が8つも選ばれており、2020年のドイツ社会に新型コロナウイルス感染症がいかに深刻な影響を及ぼしたかがここから見て取れる。

これら新型コロナウイルス感染症関連の言葉のうち1位 **Corona-Pandemie** (コロナパンデミック)、2位 **Lockdown** (ロックダウン)、7位 **Triage** (トリアージ) は、ドイツのみならず日本をはじめ多くの国々でも同じような表現を使用していて、全世界的に馴染みのある表現である。表現方法の違いが言語ごとにあるにせよ、5位 **AHA** (距離・衛生・日常生活におけるマスク着用)、6

位 systemrelevant (システムにかかわる)、8位 Geisterspiele (無観客試合) なども多くの国で話題に上ったと思われる言葉である。

ちなみに、2019年のドイツの新語・流行語大賞には、1位 Respektrente (尊敬年金)、2位 Rollerchaos (無秩序な電動スクーターによる混乱)、4位 Schaulästige (やじ馬で迷惑をかける人たち)、10位 Geordnete-Rückkehr-Gesetz (秩序正しい帰還法)²⁷ など、ドイツ (語) ならではの表現や話題が軒並みランクインしており、ドイツだけではなく世界中で2020年によく見聞きしたであろう語句が並ぶ2020年とは対照的であった。逆に言えば、2020年は新型コロナウイルス感染症が全世界的に大きな影を落とした年であったといえる。

普段は感情を表に表さないことで知られているドイツのメルケル首相は、2020年12月9日、2021年の予算案を審議する連邦議会での演説で、感情を露わにし、声を震わせて、科学的な根拠や具体的な事例を挙げながら国民に向けてコロナ対策への協力を訴えた²⁸。毎年恒例となっている大晦日の演説でも「今年はなんという1年だったのでしょうか！」という感情のこもった出だして始まり、「100年に一度の政治的、社会的、経済的に困難な年」であったと2020年を振り返った²⁹。

次に、ドイツと日本の2020年の新語・流行語大賞を比較して同じコロナ禍であるものの状況がどう違ったのかを考えてみたい。日本の場合は、ドイツと比べてよりエンターテインメント性の強い単語が選ばれやすいという傾向³⁰が見受けられるが、2020年の新語・流行語大賞のうち、新型コロナウイルス感染症に関連するものでトップ10に入ったのは、大賞の三密、4位のアベノマスク、5位のアマビエ、6位オンライン〇〇、7位 Go To キャンペーンの5つであり、その数はドイツより3つ少ない。しかも、7位の Go To キャンペーンや、コロナ関連ではないが8位の「鬼滅の刃」といった旅行や飲食、映画で人々の外出や接触を推進するような語句が2つ入っているのはドイツとは異なる。Go To キャンペーンや、映画の大ヒットによる人流が感染拡大に寄与したのでは

ないかという批判があるにせよ、2020年の日本は、感染防止策による制約を受けつつも、移動や集まり、エンターテインメントなどの社会経済活動が可能な感染状況であったことを示しているとも言える。なお、2021年3月の時点では、日本における新型コロナウイルスの感染者数は、ドイツの8分の1以下、死者数は、13分の1以下（人口比を勘案して算出³¹）である。

今後、両国の感染状況がどのように推移していくのかは見通せないが、少なくとも2021年初旬までの時点では、同じコロナ禍にあってもドイツのほうが状況はより深刻であったといえる。

3. ドイツの新語・流行語の授業への導入方法

以上、2020年のドイツの新語・流行語を題材として、ドイツの社会情勢を日本の新語・流行語とも比較しながら分析したが、ここからは、ドイツの新語・流行語をどのように授業の中に取り入れていくのかという手法を習熟度別に紹介したい。

ドイツ語中・上級者向け

今の学生の大多数はミレニアムの2000年前後の生まれであり、1978年から毎年発表されているドイツの新語・流行語大賞の半数以上は、ほとんどの学生にとって自分が生まれる前のものである。それゆえに、その時代を皮膚感覚として感じるのには難しいが、ドイツの現代史や現代社会を概括的に捉える端緒とするため、学生が1人1つずつある年の新語・流行語大賞で1位となった言葉を選び、それがなぜその年の新語・流行語大賞に選ばれたのか、その単語の意味や、言葉の由来、時代や社会的背景などを調べて発表し、関連する写真や動画があれば発表に合わせて紹介するというプロジェクト形式の授業ができる。ひょっとしたら1位となった単語であってもすでに死語になっている場合もあるし、ある年代より前の人しか知らない場合もあるが、そうであっても時代性を感じ取るために学習することは無駄なことではない。

新語・流行語大賞に選ばれる単語自体が必ずしも容易なものではないため、このプロジェクトで想定される学習者のドイツ語のレベルは中級以上である。発表言語は、習熟度に応じてドイツ語か日本語とする。定義のみをドイツ語で発表し詳細は日本語で発表するというのもよい。どこまで掘り下げていくのかにもよるが、1つの語句に10分あればできるので学習活動の1つとしてドイツ語中・上級者向けの授業に組み込むことができる。

ドイツ語初学者向け

年末にその年のドイツの新語・流行語大賞が発表されたら、その意味やなぜその単語が流行したのかを説明したり、関連動画などを見せたりしながらそれを授業で教員が紹介することにより、5分程度で最新のドイツ情勢を伝えることができる。その年の日本の新語・流行語大賞と比較してみるのも良い。1位となった語句だけを紹介・比較するのも可能であるし、トップ10のうち、いくつか学生が興味を持ちそうなものや日本社会を考えるうえでも重要な事柄を選んで紹介するのも可能である。さらに時間に余裕があれば、それぞれの国のトップ10の比較、それぞれの国でどのような分野の単語が多いかなどの分析もできる。先に紹介した2020年の場合であれば、新型コロナウイルス感染症関連の語句が多くを占めたので、ドイツらしさには乏しいものの学生にとっても馴染みがあり理解しやすいものが多い。

トップ10に入った語句には、例えば2020年4位の **Black Lives Matter**（黒人の命は大切だ）、2019年3位の **Fridays for Future**（未来のための金曜日）、2017年3位の **#MeToo**（**#MeToo** 運動）のように、もともとドイツ以外の国で始まったムーブメントがドイツに入ってきているものや、2019年に6位の **brexitmüde**（ブレグジット疲れ）、2016年1位の **postfaktisch**（ポスト真実）などヨーロッパや世界情勢に関わりがあるような語句もあり、それを通じて国際情勢について学生が興味を持つきっかけにもなる。

ドイツの新語・流行語が発表されるのは11月下旬から12月上旬であるの

で、それを教材として使うのは12月上旬以降になる。ちょうどその頃は、授業回数も折り返しを過ぎ、学生も教員もお互いのことがわかり始め、学期当初の緊張感が薄れている時期である。慣れとともにマンネリ化しやすいこの時期に、教員にはその転換の技術が求められるが、今年の新語・流行語の紹介を少し間に挟むだけで、授業にその時だけの特別感や新鮮さを与えることができる。

大がかりなプロジェクトを組み込むことが難しい場合でも、新語・流行語の紹介など日々の授業にプラスアルファを加えることで、授業がより良いものになると思う。このような小さな授業改善の積み重ねが授業の活性化、学生の語学学習へのモチベーションの維持や向上につながっていくはずである。

また、その年の新語・流行語を通じて「ドイツのいま」を学生とともに追体験する作業は、遠くに暮らす我々にとって、また、コロナ禍においては簡単に行くことのできないところになってしまい、感染症が収束した後も、ドイツと日本の往来の一部はオンラインに代替されていくであろうドイツの社会とシンクロする大きなチャンスでもあり意義深い作業である。

4. 終わりに

以上、ドイツの新語・流行語大賞を発表している「ドイツ語協会」がどのような団体であるかについて、その歴史と具体的な任務、その任務の1つである新語・流行語大賞の具体的な選出方法および選出基準について説明した。

次に、世界史的な転換期となった2020年のトップ10に選ばれた言葉を例として、どのようにドイツの情勢の分析をおこなうのかの例を日本の新語・流行語とも比較しながら示した。メルケル首相が「100年に一度の政治的、社会的、経済的に困難な年」であったと振り返った2020年の新語・流行語大賞には、コロナパンデミックに関わる表現がドイツでは8つランクインしており、ドイツ（語）らしい語句が多くランクインする例年とは異なり、ドイツだけではなく世界中で2020年によく見聞きしたであろう語句が並んだ。

日本でも新型コロナウイルス感染症に関連する表現が5つランクインしており、両国ともに2020年は新型コロナウイルス感染症の流行が社会の大きな関心事であったことがうかがえるが、日本では、人々の移動や集まりを促すような語句が2つランクインしており、その点で、ドイツと同じコロナ禍ではあるものの状況が異なっていたことが見て取れた。また、2020年の新語・流行語と関連して、両国の新型コロナウイルスの感染者数や死者数を比較しても、ドイツのほうが新型コロナウイルス感染症の深刻な影響を受けていることが推察できた。

さらに、新語・流行語の授業への導入方法をドイツ語のレベル別に紹介した。ドイツ語の中・上級者向けには学生主導で、1人1つずつある年の新語・流行語大賞を選び、それがなぜその年の新語・流行語大賞に選ばれたのか、その単語の意味や、言葉の由来、時代や社会的背景などを調べて発表する。関連する写真や動画があれば発表に合わせて紹介するという1回10分程度でできるプロジェクトの手法を紹介した。

初学者向けには教員主導で、それを扱う時間に応じて、今年の新語・流行語の1位となった語句のみを紹介する、いくつか学生が興味を持ちそうなものや日本社会を考えるうえでも重要な事柄を選んで紹介する、それぞれの国のトップ10の比較、それぞれの国でどのような分野の単語が多いか分析するなどの手法で授業にその年の新語・流行語を導入することができること、それを通じて日本とも比較しながら「ドイツ社会のいま」を学生とともに年末に追体験することの意義について考えた。

今後の課題として、2020年以前のドイツの新語・流行語の日独比較と時代による変遷の分析、また、ドイツの新語・流行語を扱った授業に対する学生の反応や意見を紹介することができればと思う。

ほぼ新型コロナウイルス感染症関連一色の2020年のドイツの新語・流行語であったが、今後ドイツでどのような新語や流行語が生まれ、それが人口に膾炙するのかをみていくことで、どのようにドイツ社会がコロナパンデミックを

超克していくのか、コロナ禍がきっかけでどのような社会の変化が起きるのか、ポストコロナの時代のドイツ社会を新語・流行語とともに今後とも見守り、それを学生にも伝えていこうと思う。

注

- 1 Gesellschaft für deutsche Sprache e. V. (2020年11月) *Wort des Jahres* (<https://gfdS.de/aktionen/wort-des-jahres/#>) 2021年2月19日閲覧。
以下、ドイツの「新語・流行語大賞」については特に断りのない限りこのサイトを参照。
- 2 Gesellschaft für deutsche Sprache e. V. (2017年11月) *Gesellschaft für deutsche Sprache in Geschichte und Gegenwart* (<https://gfdS.de/wp-content/uploads/2018/02/Brosch%C3%BCre-70-Jahre-GfdS-Doppelseiten-geringe-Gr%C3%B6%C3%9Fe.pdf>) 2021年3月8日閲覧。以下、ドイツ語協会 (GfdS) についてはこのサイトを参照。
- 3 1923年に Deutscher Sprachverein (ドイツ語協会, DSV) に改称された後、1943年まで活動していた。
- 4 Gudrun GRAEWE 「Denglisch の危険性ードイツ語の現状について」 (2007年) 『立命館言語文化研究』19巻2号, pp.227, 235.
- 5 資料は「Frankfurter Allgemeine Zeitung」や「Die Welt」などの全国版高級紙や「Wiesbadner Kurier」などの地方紙の記事、インターネットのトップ記事、Eメールや郵送で送られてきた投書（誰でも投書可能）から探し出されたもので、毎年約2,000から3,000の資料がドイツの新語・流行語の選出に使用されている。
- 6 Gesellschaft für deutsche Sprache e. V. Dr. Lutz Kuntzsch氏によるメールでの回答 (2021年3月1日)。
- 7 Gesellschaft für deutsche Sprache e. V. (2020年11月30日) *GfdS wählt »Corona-Pandemie« zum Wort des Jahres 2020*

- (<https://gfds.de/wort-des-jahres-2020-1/>) 2021年3月1日閲覧. 以下、ドイツの2020年の「新語・流行語大賞」については、特に断りのない限りこのサイトを参照.
- 8 Oxford Learner's Dictionaries (2021年)
(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/pandemic_1) 2021年02月28日閲覧.
 - 9 Gesellschaft für deutsche Sprache e. V. Dr. Lutz Kuntzsch 氏によるメールでの回答 (2021年3月1日).
 - 10 Cambridge Dictionary (2021年)
(<https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/lockdown/>) 2021年3月26日閲覧.
 - 11 時事メディカル「都市封鎖の衝撃～中世ペスト対策も再現～」(2020年12月17日) (<https://medical.jiji.com/column4/37>) 2021年4月20日閲覧.
 - 12 ニューズウィーク日本版「ドイツで抗議デモ急増、陰謀論者と反ワクチン主義者が警察とジャーナリストを攻撃」(2020年5月15日)
(<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2020/05/post-93422.php>) 2021年2月26日閲覧.
 - 13 日本経済新聞「ドイツ、国会に翻った極右の旗 大統領『民主主義への攻撃』」(2020年9月1日)
(<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO63296220R00C20A9FF8000/>) 2020年2月24日閲覧.
 - 14 NHK「Black Lives Matter が意味するもの」(2020年6月19日)
(https://www3.nhk.or.jp/news/special/presidential-election_2020/demonstration/demonstration_01.html) 2021年3月2日閲覧.
 - 15 BBC NEWS JAPAN「黒人男性、警官に膝で首を押さえ付けられ死亡 米ミネソタ州」(<https://www.bbc.com/japanese/52816160>) 2021年3月15日閲覧.

- 16 ニューズウィーク日本版「ドイツではなぜこれまで人種差別が語られてこなかったのか BLM 運動は自国の問題」(2020年6月17日)
(<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2020/06/blm-1.php>)
2020年2月25日閲覧.
- 17 中日スポーツ「長谷部と鎌田所属のフランクフルトがユニホームに『ブラックライブズマター』試合はドイツ杯準決勝でバイエルンに敗れる」
(2020年6月11日) (<https://www.chunichi.co.jp/article/71527>) 2021年2月26日閲覧.
- 18 在デュッセルドルフ日本国総領事館「ノルトライン＝ヴェストファーレン(NRW 州)における新型コロナウイルス対策関連情報」(2021年2月14日)
(https://www.dus.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.html) 2020年2月18日閲覧.
- 19 DUDEN (2020年) (<https://www.duden.de/rechtschreibung/relevant>)
2021年2月19日閲覧.
- 20 朝日新聞コトバンク 知恵蔵 mini 「エッセンシャル・ワーカー」(2021年)
(<https://kotobank.jp/word/%E3%82%A8%E3%83%83%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AB%E3%83%BC-2132095>) 2021年4月16日閲覧.
- 21 NIKKEI STYLE「新型コロナ、治療の優先順位 米医師が直面する『命の選択』の難しさ」(2020年12月5日) (<https://news.yahoo.co.jp/articles/a732d86485bdf71961298f38e2bb49c8061704fd>) 2021年2月25日閲覧.
- 22 BUNDESLIGA「ブンデスリーガ再開、5月16日に決定！」(2020年5月)
(<https://www.bundesliga.com/jp/bundesliga/news/blrestart202005-11011>)
2021年2月24日閲覧.
- 23 在デュッセルドルフ日本国総領事館「ノルトライン＝ヴェストファーレン(NRW) 州における新型コロナウイルス対策関連情報」(2020年4月20日)

- (https://www.dus.embjapan.go.jp/itpr_ja/Coronavirus_02.03.2020.html#7sochi) 2021年4月16日閲覧.
- 24 藤戸敬貴「性の在り方の多様性と法制度—同性婚、性別変更、第三の性」(2019年)『レファレンス』第819号, 国立国会図書館, pp.59.
- 25 具体的な問題点についてはドイツ語協会の下記のホームページを参照された
い。Gesellschaft für deutsche Sprache e. V. (2020年11月) *Die Position
der GfdS zur Verwendung des Gendersternchens*
(<https://gfds.de/gendersternchen/>) 2021年3月16日閲覧.
- 26 Gesellschaft für deutsche Sprache e. V. (2020年11月) *Gdersternchen*
(<https://gfds.de/gendersternchen/>) 2021年3月16日閲覧.
- 27 Gesellschaft für deutsche Sprache e. V. (2020年11月29日) *GfdS wählt
»Respektrente« zum Wort des Jahres 2019*
(<https://gfds.de/wort-des-jahres-2019/>) 2021年3月1日閲覧.
- 28 DW News (2020年12月9日)
(https://twitter.com/dwnews/status/1336616315021389824?ref_src=twsrc%5Etfw) 2021年2月24日閲覧.
- 29 Bundesregierung (2020年12月31日) *Neujahrsansprache 2021*
(<https://www.bundesregierung.de/breg-de/service/bulletin/neujahrsansprache-2021-1834002>) 2021年2月18日閲覧.
- 30 例えば2020年の日本の新語・流行語大賞の2位は韓国ドラマの「愛の不時着」、3位は Nintendo Switch 用ゲームソフト「あつまれ どうぶつの森」
7位は「鬼滅の刃」、10位にはお笑いタレントで YouTuber の「フワちゃん」であるが、ドイツの2020年の新語・流行語にそのようなエンターテインメントと関連する語句は入っていない.
- 31 2021年3月10日現在、ドイツ(人口8,310万人)の累計感染者は251万8,591名、死者7万2,489名、日本(人口1億2,562万人)の累計感染者44万1,729名、死者8,353名である.

- ・日経ビジネス「ドイツの人口、減少に転じる」(2020年10月14日)
(<https://business.nikkei.com/atcl/global/19/london/00912/>) 2021年2月25日閲覧.
- ・総務省統計局「人口推計(令和2年(2020年)9月確定値, 令和3年(2021年)2月概算値)」(2021年2月22日)
(<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html>) 2021年2月25日閲覧.
- ・Robert Koch-Institut (2021年3月11日) *COVID-19: Fallzahlen in Deutschland und weltweit*
(https://www.rki.de/DE/Content/InfAZ/N/Neuartiges_Coronavirus/Fallzahlen.html) 2021年3月11日閲覧.
- ・厚生労働省「国内の発生状況」(2021年3月10日)
(<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html>) 2021年3月10日閲覧.

参考文献

- ・Lutz, Kuntzsch und Sven, Müller (2020). Respektrente, Fridays for Future, brexitmüde - die Wörter des Jahres 2019. *Der Sprachdienst* Jahrgang 64, Mai-Juni: 113-133. Wiesbaden, Gesellschaft für deutsche Sprache.
- ・学習院大学「ドイツにおける『2020年の言葉』は Corona-Pandemie (コロナ・パンデミック)」(2020年12月22日).
(<https://de-gakushuin.jp/news/2020-12-22/>) 2021年2月18日閲覧.
- ・高田喜久司「授業のマナー化を防ぐキーポイント」(1993年)『児童心理』第47巻9号, pp.112 -118 金子書房.
- ・BILD (2020年12月30日) *33 Begriffe, die wir vor einem Jahr noch nicht kannten* (<https://www.bild.de/news/inland/news-inland/corona-33-begriffe-die-wir-vor-einem-jahr-noch-nicht-kannte74601300.bild.html>) 2021年3月3日閲覧.

Wörter des Jahres im Deutschunterricht zur Verdeutlichung der gegenwärtigen gesellschaftlichen Lage in Deutschland

Mana Fukami

Seit 1977 wird in Deutschland am Ende jeden Jahres von der Gesellschaft für deutsche Sprache (GfdS) das “Wort des Jahres” gekürt. In diesem Aufsatz werden die Aufgaben der Gesellschaft für deutsche Sprache und die Auswahlkriterien für das Wort des Jahres untersucht.

Kanzlerin Angela Merkel sagte am 31. Dezember 2020 in ihrer Neujahrsansprache für 2021: “Die Coronavirus-Pandemie war und ist eine politische, soziale, ökonomische Jahrhundertaufgabe.” 2020 war wegen Covid-19 ein Ausnahmejahr, was sich in den Wörtern des Jahres, die zur Auswahl standen, widerspiegelt. Sie werden mit den japanischen Wörtern des Jahres 2020 verglichen. Zudem wird untersucht, inwiefern diese Wörter etwas über die gegenwärtige Lage der deutschen Gesellschaft aussagen.

Weiterhin werden Möglichkeiten für den Einsatz der deutschen Wörter des Jahres im Deutschunterricht aufgezeigt.

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

和文フォントとして「MS 明朝」、欧文フォントとして「Century」を使用する。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

原則として、論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会で判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、2020年4月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は2校までとし朱筆のこと。2校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでくに注意されたい。

ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。

イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。

11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

川	本	裕	未	外国語学部	教	授
深	見	麻	奈		非常勤講師	

編集後記

COVID-19は収まる気配がない。2021年度初頭から対面授業を基本方針に授業準備が進められたが、変異ウィルスの蔓延、緊急事態宣言でそれも叶わなくなった。オンライン授業も2年目を迎える。学生も慣れてきた分、教員への要求度も高くなっている。これまでの授業の質を落とさず、学生の益を図って授業を提供することに大学教員も奔走している。遠隔授業のための機材購入やシステムのアップグレードなど、良い授業を提供するための投資も必要である。対面授業を望む学生も多いが、オンライン授業でも擬似「対面」の機会を多く設け、相互コミュニケーションが出来る様にしている教員も多い。オンライン授業の中には対面授業以上の効果もあるようだ。しばらくはこの状況が継続と思われるが、学生、教員ともここが踏ん張りどころである。Covidiotに惑わされず、コロナ感染予防へのガードを決して下げないようにする点で模範を示したい。今回の論文と研究ノートもニューノーマルの中での投稿であり、それぞれの執筆者の研究内容において示唆に富む内容となっている。ご投稿に感謝の意を表する。

(T. N.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 山 口 修

副 会 長 吉 村 京 子

編集・庶務委員 川本裕未・笹間史子・中田辰也・平松良康

大阪学院大学外国語論集 第81号

2021年 6 月20日 印刷 編集発行所 大 阪 学 院 大 学 外 国 語 学 会

2021年 6 月30日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電 話 (06) 6381-8434 (代)

発 行 人 山 口 修

印 刷 所 大 枝 印 刷 株 式 会 社

吹 田 市 元 町 28 番 7 号

電 話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 81

The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences:
Part 5 Yumi Kawamoto 1

Research Note

Wörter des Jahres im Deutschunterricht zur Verdeutlichung der
gegenwärtigen gesellschaftlichen Lage in Deutschland
..... Mana Fukami 21

June 2021

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY